

# 生命のなぞ解きに、 一緒にワクワクしましょう！

松本陽子 崇城大学生物生命学部応用生命科学科教授

生物系（生命科学）

## 薬の副作用をなくしたい！ その思いが研究者への道を開いた

高校生の頃は「化学を学びたい」という希望が強く、大学は理学部化学科を選びました。薬の開発研究において、化学を勉強したことはとても役に立っています。

熊本大学を卒業後、九州大学で薬学博士号を取得。その後、熊本工業大学（現・崇城大学）助手、助教授と、研究を続けることができました。そこで『生体模倣化学』と出会い、薬の開発研究へと研究を展開しました。この時に会った指導教授や共同研究者たちにはとても感謝しています。

その後、米国コロラド大学のCech研究室で研究の機会を得ました。帰国後は、崇城大学に戻って教授となり現在に至っています。

この分野に進み、研究者になろうと思ったきっかけは、**副作用で苦しむ人を身近で見て、そのような副作用が起らない薬の開発研究をしたいと思ったから**です。抗がん剤の副作用は、苦痛を伴い、しばしば寿命を縮めると言われるほど深刻です。正常細胞

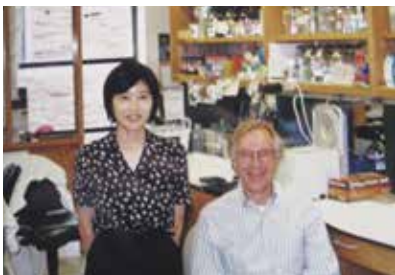
とがん細胞を見分けることができる、副作用のないがん治療薬を目指し、細胞や動物を使って研究を進めています。研究では、がん細胞を自然死させ、正常細胞にはダメージを与えないカチオン脂質膜を開発しました。担がんマウスで副作用なく、がん治療効果が得られています。

## 興味につきない、生命のなぞ

研究成果を社会に還元し、人々の健康に貢献できることを目指し、それをやり甲斐として仕事に携わっています。目標に向かって共同研究者たちと協力し、研究結果を得た時は、なものにも代え難い喜びとなります。

結婚や出産、育児と仕事を両立している女性研究者が日本でも増えていきます。年を重ねると、今度は親の介護の問題などがありますが、そんな女性研究者をサポートする体制が国や大学、企業において整いつつあります。

生命のなぞ解きに一緒にワクワクしましょう！研究室見学にも、どうぞいらしてくださいね。



Cech教授とコロラド大学の研究室にて。米国留学中の思い出の一枚



がん分子標的治療学会で研究発表（研究室のスタッフおよび博士課程大学院生たちと）



Yoko MATSUMOTO

理学部化学科  
② 大学（研究員）  
② 博士（薬学）  
② 大学教員

海外での  
研究員としての  
経験はとても  
貴重でした

### One day

7:00	起床
9:00	出勤
	講義・研究指導・論文執筆
	会議など
21:00	帰宅
	食事・入浴など
24:00	就寝

◎座右の銘

継続は力なり

◎リフレッシュ方法・落ち着く場所  
通勤中に聴く音楽、料理、家

### profile

まつもとようこ / 1979年熊本大学理学部化学科卒業後、薬学博士（九州大学）号を取得。1988年から熊本工業大学（現崇城大学）助手、助教授を務めた後、2000年米国コロラド大学博士研究員となる。帰国後、2002年より崇城大学の教授となり現在に至る。

1994年有機合成化学協会支部奨励賞受賞、2006年日本小児外科学会優秀論文賞受賞、2013年化学工学会賞女性賞受賞。



Q.これまでに退職を考えたことがありますか？

ある 20%    ない 72%    近い将来あるかもしれない 8%